Osaka Shoin Women's University Repository

長篇物語におけるならびの巻の意義

――残された問題点について――

原田芳起

一　論の始めに

源氏物語の巻々の中で、古い時代から「ならび」という名を負うて伝来されて来たいくつかの巻がある。宇津保物語にも同様に「ならび」の名を冠した巻の名がある。これらについては、源氏物語の古来の注釈ないし評論においてさまざまに論じられて来て今日に至っている。現在では、この「ならび」の巻のもつ意義についての研究は、ほぼ行きつく所まで到達していると認めてもよいかと思う。だが、すべての人に見解の一致点を見出せるまでにはなっていないかにも思われる。まだ多少の残された問題もありそうである。

「ならび」の巻という、伝来された事実がまずあって、この事実をいかに分析し解釈するかという点で、見解がさまざまにわかれ、学説の展開も見られたのである。注意しておきたいのは、伝来された事実というものが先にあるという点である。とすれば、宇津保物語における「ならび」の巻も同時に視野に入れておかなければならない。これを例外とすることは決して当を得た事ではない。源氏物語における事例を観察して、そこに一応の結論を帰納し得たとしても、それを宇津保物語の事例に適用して満足な説明を与えることができなかったならば、やはり結論自体に若干のかたよりがあるのではないかを再吟味してみなければならない。

源氏物語研究の歴史の中で、「ならび」の巻の意義に関する諸説は、ほぼ出尽くした観があるし、これ以上の論議の余地はなさそうにも思われるのであるが、残されていた宇津保物語における事例の考察をも加えて私見を

Osaka Shoin Women's University Repository

展開し、研究史上の諸説と照合してみることにする。ただし、この論の主目標は、副題に示したように、この課題における残された問題がないかどうかを検討するにあるので、記述はなるべく簡略であるように心がける。

最近に相継いで発表された門前真一氏の御論考は傾聴に価する貴重な文献であつたと思う。特に私のひそかに抱いて来た解釈ときわめて近いものがあつて、実は、氏の「源氏物語并びの巻原義考」（天理大学国文学研究室発行・山辺道・才十二号・昭40・12）を寄贈して頂いた時分、私も「ならびの巻の本義—物語享受の一形態として」と題する小文をものして、ある研究誌に載せていただくことになつて原稿をお渡ししていたが、氏の御説と重複すると思われる点が多かつたので、急いで発表を中止することにしたのであつた。氏は引き続いて、「源氏物語并びの巻の説の展開」（天理大学学報・才五十一・五十二輯）を発表され、その抜刷も早速頂戴する事ができた。これまでの、この課題に関する諸説を詳密に検討された上での、最終的な決算報告を見るような思いがした。私が発表をあわてて中止した小論で言及しようとした事の大部分はそこに尽くされていて、敬意をあらたにしたものであつた。

だから、ここに改めて言うことはないような気がする。ただ、この課題に対する、残された問題はまだありそうな気がする。本稿はそのような、わずかに残された視野を整理してみるだけのもので、あるいは、なくもがなの一文に終るかも知れない。意図する所はわずかな問題点の検討にすぎないが、論の性質上、出発点に立ち帰らざるを得ないので、おのずから言葉が多くなる事をお許し頂きたい。

二　伝来された事実としての「ならび」

「ならび」の巻というのは、平安朝時代の長篇物語の巻々の配列・序次に関する名称であつた。源氏物語において、「桐壺」を一として、「帚木」を二とするが、その次々の「空蟬」を三としないで「二のならび一」とし、「夕顔」を「二のならび二」とし、次の「若紫」を三と数えたのである。源氏物語における「ならび」の巻は、十七帖の多きを数える。それを通じてまず説明できることは、「ならび」の巻々は、長篇の巻序において、

Osaka Shoin Women's University Repository

独立した一つとして数えられなかつたということである。「空蟬」を才三の巻と数えないことが即ち「二のならび」と見なすことであつたと見るべきである。

二　帚木　並一空蟬　並二夕顔
三　若紫　並　末摘花
十一　澪標　並一蓬生　並二関屋
十七　玉鬘　並一初音　並二胡蝶　並三蛍
並四常夏　並五篝火　並六野分
並七行幸　並八藤袴　並九真木柱
二十二　横笛　並　鈴虫
二十七　匂宮　並一紅梅　並二竹河

このように「ならび」の巻々を並べて一覧して考えられることは、「末摘花」が「若紫」と「ならび」であるという関係と、「空蟬」「夕顔」が「帚木」と「ならび」であるという関係とは、構想上、ないしは話線の展開上から観察すれば、決して同一でないということである。「蓬生」「関屋」は「澪標」に対して「並一」「並二」とされているが、周知のように「蓬生」は「末摘花」物語を承けるものであり、「関屋」は「空蟬」の物語を継ぐものである。「帚木」「空蟬」「夕顔」は明らかに筆が連続しており、話線に断絶する所がないのに対し、「澪標」「蓬生」「関屋」の三帖はそれぞれ別の構想圏に属する話であつて、三帖が一体をなすというほどの緊密な結びつきは認められない。

いわゆる「玉鬘十帖」のありかたは、「帚木三帖」のそれと同じである。継続する一連の物語である。「空蟬」「夕顔」は、「帚木」を本の巻としてそれに並ぶというような対立関係ではなく、この三帖が一つにくくられて長篇源氏物語の巻序の才二に据えられているという形である。同様に「玉鬘」を本の巻として「初音」以下の九帖がそれに対立するものとは到底認められない。やはり「玉鬘」以下の十帖が一括して源氏物語の才十七として序でられているという事実なのである。この事実の解釈はすこぶる面倒な事で、これはあとの章で改めて考

Osaka Shoin Women's University Repository

えたい。

ところで、宇津保物語における「ならび」の巻はどうなっているか。現存する写本でその名をとどめているのは、形の上で二様になっている。宮内庁書陵部蔵無識語十三行本（桂宮本）や、前田家十三行本では、巻の序数は「ならび」の巻を含めての通しで付され、静嘉堂文庫蔵紀氏本、同浜田本では、源氏物語の古い伝えと同様、「ならび」の諸帖は序数の中に含まれないで、「三のならび春日詣」のように標題されている。これは恐らく後者の方が古い形を残すものであろう。

右の書陵部本（前田本同じ）の標題は、

宇津保物語一　としかげ
〃　二　藤原の君
〃　三　たたこそ
〃　四　春日詣　たゝこそのならび
〃　五　さかの院
〃　六　まつりの使　さかの院のならび
〃　七　ふきあけの上
〃　八　ふきあけの下
〃　九　きくの宴　ふきあけのならび（以下略）

浜田本の表紙の題の書きざまは、

空穂ものかたり　としかげ　一
うつほもの語　藤はらの君　二
空穂物かたり　たゝこそ　三
うつほものかたり　并かすか詣　三二

Osaka Shoin Women's University Repository

うつほもの語　さかの院　四
うつほ物かたり　并祭の使　四二
空穂ものかたり　吹上の上　五
空本物かたり　并吹上の下　五二
宇津暮ものかたり　并菊の宴　五三
宇つほ物かたり　あて君　六

紀氏本も巻序の数え方、「ならび」のありようは右と同じだが、題の書きざまは、

うつほ一　初巻
〃　二　ふちはらの君
〃　三　たゝこそ
〃　三ならひ　かすかまうて
〃　四　さかの院
〃　四ならひ　祭のつかひ
〃　五　ふきあけ上
〃　五　吹上下
〃　五ならひ　菊の宴
〃　六　あて君　（以下略）

となつている。この方では「吹上下」に「ならび」の名を冠していないので、浜田本のそれと小異を認めるべきか。紀氏本のそれは、源氏物語の「若菜」が上下を分けずに才二十とするのと同じであるかと思われる。河海抄には、

うつほ物語云、才三の並春日詣、又才五（ふきあげの巻）の並祭の使・菊宴などあり。

Osaka Shoin Women's University Repository

とあるが、「祭の使」を才五の並びとする点で現存諸写本のそれと異なる。

さて、「春日詣」を才三の並びとする配列は、源氏物語の「空蟬」「夕顔」を才二「帚木」の並びとするのと似ている。「帚木」から「空蟬」「夕顔」と一続きの物語であり、一巻にしてもさして不自然でない。殊に「帚木」の冒頭の草子地と「夕顔」の結尾の草子地とは相呼応して首尾をなしている。宇津保物語の「春日詣」は「忠こそ」の後日談という性格を持つが、左大将正頼一家の春日社参詣の物語が両者をつないでいる。筆も明らかに「忠こそ」の末段から直接連続する形を持つから、この二つの巻を離して読んでは、この話線の連続もこわしてしまう。単に年立の前後というだけで巻序を立てれば、「春日詣」は「嵯峨院」より後に置くことになるが、そして「忠こそ」は「藤原の君」の前に置かなければならなくなるが、長篇的構想から考えれば、新しい話を添加し、新しい人物を登場させる場合に、遠い過去に筆を返して語り始めるのは自然の事であつて、年立の先後は必ずしも巻序決定の規準にはならない。「忠こそ」と「春日詣」とは一連の物語であり、文章も直接連続しているのだから、これを一巻にまとめても格別の支障はないのである。長篇としての「うつほ」の物語を一時中断しておいて、新しい人物を登場させて、これを物語の本流に合一させるので、その合流点は、「春日詣」の始めの時点である。時間の流れからいえば、「嵯峨院」の巻の終る所から、「春日詣」の巻が進行する。だから、合理的に巻序を考える立場を取れば、「忠こそ—春日詣」のならびを「嵯峨院」の次に置く方が、伝来された巻序よりもはるかに自然である。「嵯峨院」を才三とし、「忠こそ—春日詣」のならびを才四とするならば、私の巻序論を満足させるのであるが、伝来の巻序も全く理解できないというのでもない。それは、「忠こそ」と「春日詣」が、ならびではあるが、別の巻としての独立性を持つ点にかかわる。「忠こそ」が、典型的に継子いじめの物語として、説話性の強い、それ自体としてまとまろうとする独立的方向を持つこと、その点で「俊蔭」「藤原の君」と対立した多頭的構成をなすことが、読者に強く印象される。清原俊蔭と、一世の源氏なる藤原の君正頼と、右大臣橘の千蔭とが、別個の物語の主人公として、三つの流れをなして語られる。それぞれの流れから才子仲忠と佳人あて宮と忠こそ法師が誕生する。そこで物語は一つの流れに合わされるのである。忠こそ法師はし

Osaka Shoin Women's University Repository

かしながら物語の主流においては主人公ではありえない。あて宮物語の中での一点景人物たるにとどまる。仲忠は琴の伝統の保持者であり、「ざえ」の世界ではあて宮に優位する。「ざえ」の尊貴を主題とするこの物語では、やはり仲忠が主人公であり、あて宮は物語を修飾する花である。「藤原の君」を才二とし、「忠こそ」を才三とするのは、物語構成からしてもそう不自然ではない。ここではそれぞれ過去にさかのぼる物語の頭を持つのであるのであるから、そのさかのぼる部分の年立は、物語の長篇としての進展においては、一応、別のものとして括弧に入れてしかるべきものである。

「祭の使」を才四「嵯峨院」のならびとする伝来はいかがであろう。年立からすれば明らかに才五「吹上」の上下の中間に位置するし、才三のならびとされる「春日詣」の直後をつなぐものである。話の筋からしても、吹上の源氏の君涼があて宮求婚者の一人に加わつているから、「嵯峨院」をすぐに受けるものとはいえない。合理的な説明のきわめて困難なケースである。強いて説明を加えるとすれば、「祭の使」を才四のならびとする指定は、「嵯峨院」に続けて、その展開として読む、という、読みかたの指示である。賀茂の祭の勅使が左大将正頼の家から立つたということは、この巻の始めにおける一点景であるにすぎず、物語の中心となつているのは、「嵯峨院」のそれと同様、あて宮を求める男たちの妻どいくらべである。作者のねらいも、恋の風雅のさまざまを展開して見せるにあつたと見られる。「春日詣」の物語がこの二つの巻の中間に入ることは明らかであるが、その話の中心になるのは、春日社頭における忠こそ法師の意外な出現であり、「忠こそ」の巻の忠こそ出家の話の後日物語である。ここで忠こそ法師が懸想人の一人に加わることで、あて宮物語が一段と多彩になることはいうまでもない。前述のような理由で、「春日詣」を忠こそ物語を展開させるものとして、一つのならびとして把握したとすれば、「祭の使」をも年立的時間を一部無視して「嵯峨院—祭の使」を一つのならびとしてまとめたと見なすことができる。一歩を進めて考えれば、年立的時間が前後するが故にこそ、「ならび」という考えかたが導入されたと見るべきかも知れない。

「ならび」がいかなる意義を持つか、その本義の論は、あとで一項を立てて考えよう。ここでは、伝来された

Osaka Shoin Women's University Repository

「ならび」の巻の名について、事実をもうすこし観察しておこう。前述したように、河海抄の引く所では「祭の使」を才五「吹上」の並びとする別の伝来があつた。この方が年立の関係からすれば説明し易い。源氏物語における「末摘花」を才三「若紫」のならび、「蓬生」「関屋」を才十一「澪標」のならびとするのと似ている。ほぼ同時期の物語であるが、独立した一巻として長篇の中に一直線に続けにくい事情がある点は、源氏物語の場合も同様である。ただ、「末摘花」「蓬生」「関屋」は、源氏物語では傍流の物語であるが、「祭の使」は決して傍流ではなく、「吹上」こそ傍流であるという点は同じではない。「ならび」の巻のありかたと構想論的な主流傍流のかかわりかたについては、これもあとに項を立てて改めて考えることにしたい。

宇津保物語浜田本では、「吹上下」を「并吹上の下　五三」と標示している。これは浜田本に特異な現象かと思われる。紀氏本では「吹上下」は「吹上上」と同じく「五」とだけあつて「ならび」という指示がない。これは源氏物語で「若菜」が分冊されていたであろうに巻序を示す数字は「二十」だけであると同じであろう。一つの巻を二つに分けたという扱いであろう。「吹上上下」に「祭の使」を「ならべ」る形は、「若紫」に「末摘花」を「ならべ」るそれと似ている。にもかかわらず、主流傍流の関係は逆である。「吹上」が副次的な物語を設けて、「祭の使」で本流の物語につながれるのであることは明白である。

「菊の宴」が才五「吹上」のならびとされるのは、「春日詣」が「忠こそ」のならびとされるのと同じである。もし「ならび」が物語の本流に対して並ぶという意味を持つとするならば、誠に不可解な事実となるであろう。事実は当然解釈に先行する。事実に適しない解釈は、修正を要求されざるを得ないであろう。

三　「ならび」の名義に関する問題

定家の「奥入」に既に「空蟬」を「二の並とあれど帚木の次なり。並といふべくもあらず」と疑つていることをどう解すべきであろうか。「並ぶ」と言えば、「並列」「並立」の概念が思いおこされる。然るに、「空蟬」は「帚木」をそのまま続けているのであつて、並列でない事は明らかである。だからといつて、並列でないが故

Osaka Shoin Women's University Repository

に、「ならび」でないと断定するとすれば、解釈を先に立てて事実に変更を加えることになり、妥当でない。

「河海抄」では、「凡そならびの本意は横の義たるべきなり」と注している。これも解釈が事実より先に立つたものである。「横の義たるべき」という観念が先にあつて、それを事実の上に当てるから、「凡此物語の並の様一偏の事とも見えず。横竪ある歟。同つづきの事を分てると見ゆる並もあり。是を竪の並といふべきにや。いまの空蟬の巻これなり云云」というような解釈も生ずる。横が本来の形で、竪はその変様と考えるのであろう。縦に並ぶということに言語上の矛盾はさしてない。だがその意味でならば、源氏物語全体が縦に並べられていて、所々で二つに分かれて横にも並ぶことがあるというべきである。長篇の中の部分をなす一群の中で、一を本、他を「ならび」と特に指摘する意味は、それとは何らか区別されるものがなくてはなるまい。同じ「河海抄」に「玉鬘の並は横竪相交れり」という解釈例があるが、これはどういうことなのか。ここにも解釈の混乱がありそうである。事実は「初音」以下の九帖を「十七のならび」とするものである。「玉鬘」から「真木柱」までの十帖の間には年立上の横と呼ぶべき要素は存在しない。「河海抄」の作者は、「玉鬘」以下の十帖を「少女」の巻と並べて考えてしまつたのであろう。「末摘花関屋蓬生は一向に横の並也」と注している。それを「ならび」の本義とし、それに引き寄せようとする気持が、「されば奥入にも『二の並とあれど帚木の次也。ならびといふべくもあらず。一説には、かがやく日のみや（此巻もとよりなし）並の一帚木（空蟬は此巻にこもる）二夕顔』といへり」という定家以来の修正意見に、無意識裡にかも知れないが、近づいて行つたものであろう。だが、新たに「ならび」を立てるのであるならば問題は別であつて、伝来された「ならび」の巻の事実をどう解釈するかという立場からは、そのように事実をまげて考えることは本末をとりちがえたものとせざるを得ない。「うつほの物語のならびも横とみえたり」とあるのも事実に相応しない。横とすることができそうなのは、「吹上上下」を一巻として、そのならびとして「祭の使」を配した場合のただ一例にすぎない。他は皆、横と認め得るものはない。

「ならび」の「横・竪・横竪」説は、一見合理的に見えて、殆んど「ならび」の実事例を説明する力がなかつたことは、右にいささか触れた所でもわかる。「河海抄」以後の横竪説の展開については、門前氏が詳しく考え

Osaka Shoin Women's University Repository

ておられるので、改めて触れる必要もあるまい。格別強化された点も認められないし、ただ疑いを存しながらこれを承け伝えたにすぎないもので、門前氏が「横竪の区別を廃棄すべきものと思つてゐる」（前記天理大学学報五十一輯の論文）とされる見解こそ、正当な批判であろう。

「ならび」とは、横に並列するという意味でもなく、まして縦に並んでいるという意味でもあるまい。前に触れたように、「ならび」の巻にすべてに共通している点は、何らかの意味で本の巻と一つにくくられ、独立の巻序としては数えられないことである。その本の巻とは、必ずしも物語の本流を意味しない。

そこで、これも周知のように、「河海抄」に注意すべき一説をあげている。それは、

中院事書云、尚書の篇の定様、此ならびの義に相似歟。彼序云、「以二舜典一合二於堯典一、益稷合二於皐陶謨一　盤庚三篇合為レ一。康王之誥合二於顧命一」等也。しかれども今の並の心にはたがひたる也。並は、比隣匹方并配是等の皆ならびならぶの訓あり。広韻云、并は合也。又詩賦序に并序とかけるを、菅家説に「序をあはせたり」と読て、自余は「ならびに序」と読也。是も今の並の心にいささか相似たる歟。

というのである。この「中院事書」の説は、「弘安源氏論議」の「巻々にならびをたつる事、そのゆゑおぼつかなし」という問に対する左方の答に「尚書のおもかげをうつせるか、いかが」とある意見と同じ筋のものであろう。明確に断定し主張した説ではなくて、「ならびといふべくもあらず」という「奥入」などの素朴な疑いから出発したものと推定してよかろう。漢学畑の人から当然出て来る助言であろうと思われる。

右に引用された尚書の序については、玉上琢弥博士は次のように説明して、尚書序と並びの巻とには関係がないことを論じておられる。

この序は「尚書孔氏伝」の序であつて、……この「孔氏伝」の序の「河海抄」の引用箇所前後の意はこうなのである。孔氏の旧宅の壁中から古文の「尚書」が発見された。この古文の「尚書」には、当時の通行本「今文尚書」にない編が二十五あり、同じ内容の編でも細かく分けてあるところがあつた。例えば伏生の

Osaka Shoin Women's University Repository

「尚書大伝」は「古文尚書」に「舜典」としてあるのを「堯典」の中に、「益稷」と独立させてあるのを「皐陶謨」中に、「庚王之誥」は「顧命」にそれぞれ入れてあるが、「古文尚書」はこれらを一編として独立させてある。また古文には「盤庚」を上・中・下三編とするが、伏生は一編としてあるというのである。……だから、ここに引用された尚書序そのものは並びの巻と何ら関係がないのである。（「源語成立攷」国語国文・昭15・4）（源氏物語評釈別巻一「源氏物語研究」による）

これは従うべき御説である。「尚書序」では「伏生又以舜典合於堯典云云」とあるのに、「河海抄」には「伏生」という主語を省略して引いてある。

ただし玉上博士も「尚書」の編の配列が一様でないという点に、並びの巻と似る所があるかも知れないと言及しておられる。博士は「横竪」説ははっきり否定しておられるようで、「古く伝わった並びの巻に何らかの意義を認めようとするならば、横竪というごとき構想論的立場は離れて考えるべきであろう」と説かれる。これは全く正しい御意見であると思う。そこで博士は、並びの巻の設定が成立事情に関連するものであるならば、例えば、「帚木」の並びはこれだけで独立したものとして一まとめに観照するにたえるように作られてあり、「若紫」「末摘花」もそれぞれ基調を異にするがゆえに二巻にされたのであり、「匂宮」の並びは三巻で一単位となり、正続両編を結ぶのであり、一まとめにして発表されたであろう、としておられる。「ならび」の巻の事実を妥当に説明されたすぐれた仮説である。「ならび」の巻が成立事情に関し、作者が一まとめにして発表したという事にもとづくものか、構想論的な、本系傍系というような区別の表示であつたものかは、あとでもう一度考えてみるとして、博士が「一まとめにして観照されることを求めるべき巻々」とされたのは、「ならび」の巻の本質を正しく射当てられたものである。

そこで、「ならび」の名義であるが、「河海抄」引く所の「中院事書」の中に、「並は比隣匹方并配是等皆ならびならぶの訓あり」とあるのは、動詞「ならぶ」の多義性に触れたものである。「広韻云、並は合也。又詩賦序に、并序と書けるを、菅家説に序をあはせたりと読て、自余は、ならびに序と読也」とあるのは、「ならび」

Osaka Shoin Women's University Repository

の名義を知るには、やはり一番近い手がかりである。

門前氏は「山辺道」才十二号「源氏物語并びの巻原義考」にこの点を詳密に論証して、「源氏物語の并びの巻の名称は当然并の才二次的訓ナラブ、ナラビに由来するものであろう」ことを明らかにしておられる。つまり、「一つに合はせる」こと、「并」字の本義が「ならび」の原義であるとされるのである。この結論には、私も全く同意で、私が言おうとしたことを更に詳密に言つて下さつたと思つている。

門前氏が参考とされた氏の令息正彦氏の、「漢文訓読史上の一問題(四)并字の訓について」(訓点語と訓点資料才十四輯)は、この問題について示唆する所の多いありがたい労作である。氏によれば、「并」「並」両字の間には本来の意味・用法の差別があり、平安初期の訓点では「并」は接続詞的に用いられて「アハセテ」と訓読されたことが知られる、時代が下るにつれて「ナラビニ」という訓がそれに取つてかわつている。「并」「並」両字の区別が意識されなくなつた結果である、「並」は本来横にならぶ意、并は合はせて一つにする意であるというのである。

物語における「ならび」が「並」でなくして「并」であることは、ほぼ明らかであると思われる。「ならび」の巻は本の巻と合わせて一つになるべき巻である。「ならび」の語義がこのような多義化を見るに至つたのは、「并」を「ナラビニ」と訓読するようになつた事に起因する特殊な性質のものであつたとすべきであろう。ただ、「ナラビニ」は接続詞、「ならび」は名詞である。万葉集の「三山御歌、并短歌」の「并」も中国語としての「并」は接続詞である。「短歌ヲ并セタリ」という訓読は「并」の字義を明らかにする事を先にして文の形態を変えたものといえる。「アハセテ短歌」と訓ずることで、「并」の文法的機能をも移し留めた事で一つの進歩であつたと考えもよい。「アハセテ」から、「ナラビニ」に転じたのは、字義の混同もさることながら、「アハセテ」が動詞的用法の匂いが強く、国語としては接続詞になりきれない不安定を感じさせたのではなかろうか。「ナラブ」の語意に、同列に相接してある意も生じて来れば「ナラビニ」は「并」の訓として国語の語感としては安定したものがあつたろう。そこで「三山之歌并短歌」が「ナラビニ短歌」に定まつて来れば、その短歌はそ

Osaka Shoin Women's University Repository

の本の長歌と「ナラビ」の関係であると意識されて来よう。「二帚木并空蟬」は「二帚木ナラビニ空蟬」であり、再転すれば「二帚木ノナラビ空蟬」となるであろう。

国語の「ならぶ」本来の意味は「並」に近い。「たぐふ」「くらぶ」などと類義語で、二つまたはそれ以上が並んである意味である。男女が二人並ぶように。「立」を二つならべた文字が「並（竝）」である。

「ならび」の巻は門前氏の説かれるように「并び」の巻であると断定してよい。それは訓読語系であり、「并序」「并短歌」のような題詞、ないしは目次の形を離れては考えられない。万葉集の目次に現れるのは「并」が通例で、寛永版本の中でまれに「並」があるが、それはまぎれたものであろう。

宇津保物語の写本では、浜田本の標題にはすべて「并」字が書かれ、前田本・桂宮本・紀氏本等は仮名で「ならひ」とある。

四　形態論的な意味について

「河海抄」の「横竪」説は、ただ年立との関連だけを問題にしたもので、「ならび」の事実を説明し得ないものであつたことから考えると、そこから構想論的意義を導くことは根本的な無理がある。

「ならび」を史記の列伝になずらえる説がある。細流抄に「総じて並の事、史記本紀の外に列伝を立たるに同じかるべきか」とあり、「岷江入楚」には、「桐壺」から「匂宮」までの本の巻二十七巻を本紀に、宇治十帖を世家に、並び十七巻を列伝に、細かになずらえている。これは「横竪」説から発展して、物語の構成・構想の論に、「ならび」の巻を意味づけようとしたものである。そういうものとして研究史的には意味がある。本紀に対する列伝という考え方は、物語の本系の巻々に対立するものとして並びの巻をとらえようとしたものである。しかし、前に見て来た「ならび」の事実は、本系傍系の対立とは見られない事例を多く含んでいる。「空蟬」「夕顔」は「二のならび」である。「帚木」との間に「ならび」の関係があるのであつて、本系の巻々に対する「ならび」とはされていない。玉鬘十帖においても「玉鬘」こそ傍系の物語である。本紀の中に収めるのは明らかに

Osaka Shoin Women's University Repository

条理に反した処置である。「列伝」説が構想論の方向に前進しようとした歴史的価値は認めるが、「ならびの本意は横」という先入主の支配下での宿命的な弱点をまぬがれていない。

賀茂真淵の「源氏物語新釈」に

竪とは本系の事にて、源氏はもとよりにて、葵上紫上などの本系の類をいふ。此空蟬の巻などの類は、本系にはあらねど帚木の巻よりつづきて一つの筋なれば、横といふべからず。よりて竪の並とはいへり。されど猶是は横ともいふべければ、又横といふ類を一つたててていへば、暫並とはいふのみ。

とあるのは、論理があいまいで、ごまかしに近い所があるようだが、「竪」と「竪の並」と分けて考えているかに取れる。物語の本系が「竪」だというのと、「竪の並」とは別と考えていると取らなければ意味が通じない。ともかく本系の巻々と並びの巻々とを対立させて構想論的意味を認めようとする点、前の条の「列伝」説と同一方向である。その底には並ぶものは横であるという観念がある。

「ならび」の巻に構想論的意義を求める立場が、本系傍系の対立した物語展開にその根拠を求めるのは、無理からぬ点もある。

「日本古典全書源氏物語㈠」の巻頭の解説における並びの巻に関する説は、池田亀鑑博士の御見解を簡明に知るに適している。

源氏物語は本来長篇的ではあるが、併し箇々の巻々が必ずしも長篇的構想のもとに立てられているとは言へない。例へば帚木空蟬夕顔の三巻の如きは、長篇小説としての主流的構想からさほど重要でない挿話的事件を取扱つており、しかもそれぞれ独立した効果をもつてゐる。ここにおいて読者は、ともすれば、この巨大な小説の主流を見失ひ、岐路にふみ込みやすく、つひに冗漫と矛盾を感ずるやうになる。並びの巻はかやうな構想上の不安について或る程度の安定を求めることに成功してゐる。即ち横の並びは、孤立的な、云はば短篇的な巻々を暗示し、竪の並びは同一主人公によつて統一される連続的な、少なくともそこにおいては長篇的な巻々を暗示している。幼稚な構想論的意識の産物であるが、一応注意に値するものである。

Osaka Shoin Women's University Repository

問題はやはり竪のならびと横のならびとが、一つの「ならび」の概念でどう統一されるか、という点にありはしないだろうか。いわゆる竪のならびにおいて、例えば「玉鬘」のならび九帖が本の巻たる「玉鬘」に摂せられて一つに扱われる事によつて、本の流れたる長篇の展開が混乱なく読み取られることは事実である。「玉鬘」十帖は「玉鬘」を含んで挿話である。一息入れてわざと道草を食つている巻である。それを標示するのが「ならび」であるならば、「玉鬘」を含めて「ならび」の名を冠すべきであつたろう。「奥入」に見えた「輝く日の宮」という本流の巻を仮定して「帚木」をその「ならび一」とするのは、「ならび」とはそのようなものであつてほしいという見解による推定説であつたと思われる。ところが事実は、いわゆる竪のならびは「奥人」にあげた一説のようになつているものはない。宇津保物語における事例では、現存の写本に見える限りでは、三例ともいわゆる竪のならびである。横と見えるのは一例もない。しかもその「ならび」に対する本の巻は、長篇の本流ではなくて傍流である。そして「ならび」とされた巻の方が長篇の本流の中に加わつている。三例ともそうなつているのである。右に引いた古典全書の説では、長篇小説が岐路にふみこみやすく冗漫と矛盾におち入ることを並びの巻が救うているように説かれているが、どのようにして冗漫を救うのであろうか。「帚木三帖」や「玉鬘十帖」は、むしろ筋が単一になることを救うべく、わざと岐路を求め、変化を求めているというのが真実である。そのわざと岐路を求めた巻々を、本流と同じく通して巻序を与えれば、その区別がぼやけてしまう。そこで読者に対する指標として、数巻を一部としてまとめて一つの序数を冠する。そこが構想上特殊性を持ち、多様化をねらつた部分であることを指示している。だが「ならび」が本流に並ぶという意味は認められない。数巻が一部になつている事が、本筋に対立する道草的挿話である事を示す。

「ならび」の巻に対する本の巻が、必ずしも物語の本流に属しないことは、事実の示す所で、変更も修正も許されない。本流ということと、「ならび」に対する本の巻ということとを、厳に区別しておくことが必要であろう。

「三若紫、并末摘花」の場合は、「若紫」は本流、「末摘花」は傍流である。だがここで注意したいのは、

篇的な巻々を暗示している。幼稚な構想論的意識の産物であるか、一応注意に値するものである。

Osaka Shoin Women's University Repository

「末摘花」の冒頭は「夕顔」を承けて筆を起こしている、作品自体の持つ構想形態と「ならび」の標示とは必ずしも一致しないということである。ここでは、「末摘花」を独立した巻序に数えないで、時間的に重なる「若紫」と合わせて一つに数えることで、中心の筋の流れをしばし遮つて、路傍の景物にやすろうている趣がある。紫の君と常陸の宮の姫君とを対比して、ゆつくり人生の明暗二筋の道を味わせようとする栞がここの「ならび」の標識であつたのではないか。

「十一澪標、并一蓬生、并二関屋」の場合もほぼ同じである。本の巻が本流に属している。ただ読みようではこの三巻は、明石の君・末摘花・空蟬と、過去に源氏と交渉をもつた三人の女の三様の悲しさを描いて、三部作的構成をなしているとすることができる。長篇の筋としては、帚木系グループを統合して、本筋に対立させし、変則的ではあるが三部作的構成を示している。そのような作品自体の持つ構想論的形態の標示としては「ならび」は不完全であり、「ならび」の指示し得ているのは、数個の巻を一つに合わせて一の巻序に数えるということだけである。

「二十二横笛、并鈴虫」の場合、どちらが主筋でどちらが副と定めることはどう考えてみても無理なように思われる。「横笛」が夫君柏木を失つた落葉の宮の心細い境遇を描けば、「鈴虫」はなき柏木を人知れず忍んでいる女三宮のあわれさを中心に展開する。どちらも柏木の死の後の哀傷に満ちている。年立的には「横笛」を源氏四十九歳、「鈴虫」を五十歳とすれば、この二つの物語は続きである。竪の並びと注されている所以である。しかし、「横笛」から「鈴虫」への時間の推移を感じさせるような展開ではない。柏木の悲劇的な死を承ける点で同じであり、むしろ横の展開という印象である。一つの哀傷を二つの巻に分けて書いていると見られよう。部分的に二部作的構成の形を見せる。これを一つに合わせて読ませようとする指示が「横笛并鈴虫」であつたとすれば自然である。ただし「鈴虫」が副であるのでなく、付属であるのでない、対等に配された「ならび」なのである。両巻一部として巻序の一つの位置を与えたのである。その点では帚木三帖や玉鬘十帖を挿入した方法と同じ形になる。帚木三帖を「桐壺」と「若紫」の間に置いたと同じ形で、「柏木」「夕霧」の中間に挿入されたのが

Osaka Shoin Women's University Repository

「横笛」と「鈴虫」とであろうという気がする。特に「鈴虫」の巻の冒頭は「柏木」の巻に呼応するものが感じられる。「柏木」では、柏木なき後の一条の宮（落葉の宮）に対する夕霧の関心が次第に高まつて来る過程がこまかに書かれている。特に時間の推移とともに、一つの事件が進行する形を示している。それを承けて「夕霧」では、「まめ人の名を取りてさかしがり給ふ大将、此の一条の宮の御有様をなほあらまほしと心にとどめて、大方の人目には昔を忘れぬ用意に見せつついとねんごろに」と、同じ方向に進展を示している。その中間に時間的空白を設けて、抒情的な「横笛」と「鈴虫」の二巻をさしはさんだと見なすことが正しくはなかろうか。そこではむしろ時間の進行をひきとどめようとする。哀傷の心の限々を尽くそうとする。読者はその構想に添うように読むべきである。「横笛并鈴虫」もそのようなしばし立ちどまつている形であり、ある意味で徘徊趣味（漱石のいわゆる）の巻であつたわけである。そう見るならば、作者の意図を読み取つた、作品の本有する構想形態を理解した、読みの標識であつたと、ためらいなく評価することができる。

「二十七匂宮、并一紅梅、并二竹河」も、どれが主どれが従ということもあるまい。竪か横かの論ももはや無用であろう。「三帖で一単位となり、正続両篇を結ぶ」と「源語成立攷」（玉上琢弥博士）に説かれている通りである。正篇の時代に顕要だつた誰彼の、なくなつた後に生い出で、その蔭に立ち継ぐべき若き人々のこぼれ話をあれこれと聞書風に書いた短篇が三つ一まとめに置かれている。縦に継いで見る事はできない三篇である。別に「宇治十帖」につなぐという形でもない。てんでんばらばらに配置されている中に、おのずからに一つの物語の大筋に帰する所があるように書いたものであろう。「宇治十帖」が長篇的構想を取つて正篇に照応するに対して、わざと展開を断ち切るように雑然とした構図を取つているとも言えようか。この三篇を一つにまとめることで長篇的構成への調和を保つ。少なくともそうした形に導いて読む享受の形態がおのずからに成立したのであろう。匂宮三帖もいうならば徘徊趣味の巻々であつたのであり、長篇を前方に推し進めるよりも、過去の光のまだかすかにさしている中を、行きがてにしてたもとおる気分のただよう世界であつた。「ならび」では巻序の数字が前に進まない。一つの位置だけを与えられている。長篇的構想における主流傍流ということは少なくとも直接

Osaka Shoin Women's University Repository

関係はないし、本質的なつながりもない。

宇津保物語における、「三忠こそ、并春日詣」では本の巻「忠こそ」が傍流、「春日詣」の方が本流の要素を具している。「四嵯峨院、并祭の使」では本の巻も並の巻も本流で、これだけが例外になりそうである。「祭の使」を年立的位置と離して、「嵯峨院」に続けて読んだ方が面白いという意味でこのような標示がなされたものかと思う。河海抄の伝える「五吹上（上下）并一祭の使、并二菊の宴」の方が、他の事例とは調和する。これは傍系の「吹上上下」を本系の物語に結ぶために「祭の使」「菊の宴」につないだのである。この形では本の巻が傍系、「ならび」の巻の方が本系という形に取る方がむしろ自然なのである。

「源氏物語講座上巻（昭24・7）」で、「並の巻の構想論的意義」を論ぜられた寺本直彦氏は、

源氏物語の特異な二元的構成にその発生の理由、存在の根拠を持つ。

と説かれ、

一貫する長篇的物語中の一巻が、本の巻と別個の内容を同時的に並進せしめ、独立的短篇的な物語をなした場合、此処に横の並が生じ、又一面独立的短篇的傾向を有する巻々が、本の巻と同一内容を継時的に展開し、それが長篇的意図によつて統合一括せられて他の巻々と区別せられる時、此処に竪の並が生ずるのである。

と説明しておられる。「二元的構成」とは、長篇的であろうとする方向と短篇としてまとまろうとする方向とがかみ合うということであるとすれば、前に述べた「ならび」によつてまとめられた巻々が、それぞれの位置で、主流の物語の展開を一時的に断ち切り、あるいは隠れた隈々をさぐり、あるいはさまざまに変わつた品々を求めて徘徊しようとする方向は短篇的手法といえようと思う。言い換えるならば、話をさきに進めようとする方向と、周辺に向かつて拡がろうとする方向との相関であるとも説明できる。それは長篇においてはかなり普遍的に見られるもののように思われる。そうした意味でならば、基本的に同意できる御説であつたと思う。

そこで、「本の巻と別個の内容を同時的に並進せしめ、独立的短篇的な物語」をなした横の並であるが、物語の時間的前進をしばしとどめて周辺を眺めるとすれば、その本の巻にもおのずから短篇的性格が付与される。た

Osaka Shoin Women's University Repository

とい「末摘花」が後記挿入であつたとしても、「末摘花」が「若紫」を意識し、それと合わせて可能な限りでその周辺に拡げて見たのである。「末摘花」の構想を誘う要素が、「若紫」の中にあつたはずである。それは「若紫」自体の中に内蔵する短篇性である。「これはいと様かはりたるかしづきぐさなりと思いためり」と結ぶ紫の姫君の物語は、一面から見ると、「様かはりたる恋」の一つとして書かれていて、空蟬なり夕顔なり末摘花なりのそれと同じ短篇性を具している。藤壺の宮との宿命的な恋や、その藤壺と紫の姫君との血のつながりなどは長篇構想の太い糸であやつられているから、「若紫」の巻には二重の性格がひそめられているといえよう。「末摘花」の巻はその「若紫」の中の短篇性に照応して書かれていると見ることができる。周辺への視野を求めて徘徊する、時間をしばしおしとどめようとする方向を見ると、前にも説いたいわゆる竪のならび、「玉鬘」とその「ならび」九帖に見られる構想的性格と共通なものが認められるのではないか。

「独立的短篇的傾向を有する巻々が、本の巻と同一内容を継時的に展開し、それが長篇的意図によつて統合一括せられて、他の巻々と区別せられる」いわゆる竪のならびはどうか。「長篇的意図」とはスペースの延長について言われるのであろう。実質的には源氏物語なり宇津保物語なりの全篇を貫く長篇的意図とは方向の全く異なつたものである。事件の進行をさえぎり、場面のひろがりを求めるのであるから、むしろ短篇的方向を強くもつものと感じられる。次に「他の巻々と区別せられる」というのは、きわめて重要な点である。縦のつながりをしも「ならび」と称するならば、長篇全体が一つのならびになつてしまう。「ならび」の巻の原理は、「区別される」とはいかなる事かという点にかかつて来る。「ならび」の巻々は長篇的事件の進展を意味しない、周辺への視野の延長という方向を取るから、おのずからおもむきを異にしているのである。そうした二元的構想形態を指示するために、「ならび」の巻々を序数からはずして外に出したと解されるのである。

五　「ならび」と本の巻と

門前真一氏が「ならび」が「并」であつて「並」ではないとされた説が是認さるべきことは前に述べたし、横

Osaka Shoin Women's University Repository

竪説を排されたことに同意であることも詳述したつもりである。また「並の本意は横の義たるべきなり」という説は「並」の意に取つたがための誤りである事も強調した。

ここで念のため、「ならび」の本意は横であるとの先入観をもつと強く排除しておく必要があろう、ということを再説しておきたい。

門前氏が、前記「山辺道」才十二号の論文で、

> 才一段階の并びの巻の説は、すでに冒頭で述べたやうに、一応源氏物語五十四巻を本の巻と并びに分ち、漠然とであるが主想、副想の対立をとらへたと思われる。……結局并びは本の巻に対してなんらかの附属的関係にある巻であるといへよう。そしてこれが并びの原義である。

と説いていられるのは、無意識裡に、主想と副想を並べて構成するという、一旦否定された「並びは横」の概念がよみがえつているのではないかと気づかわれる。五十四帖を本の巻と并びの巻とに分けるという点もいかがであろうか。一方では、たとえば「空蟬」「夕顔」に対する「帚木」が「本の巻」と見られ、他方で物語全体における「并び」でない巻を集合として「本の巻」と見なされる。この二つの「本の巻」は相容れないものを含んでいる。前述したように帚木三帖なり玉鬘十帖なりは「帚木」なり「玉鬘」なりを含んだ群が一つにまとめられて、物語の主流たる「本の巻」の群に対立する。主流と傍流との関係は明らかに対立し並進する。そこには「ならび」即ち「並立」とする、一度否定されたはずの観念が根強く存在しなければならない。

「并ハ合也」という意味を原義と考えるところの「ならび」の観念は、「空蟬」「夕顔」と「帚木」との間に考えられるもので、「本の巻」たる「帚木」にあわせて一つにする、というのである。「空蟬」「夕顔」を紫のゆかりの物語にあわせるという意の標示でなかつたことは確かである。「空蟬」「夕顔」の「帚木」に対する「ならび」の関係は付属とは見えない。三つの巻が全体を分有するので、主副関係や従属関係を条件としない。

「天理大学学報」才五十輯において門前氏が「并びは全部横である。したがつて緊は本の巻といふことになる」と書いておられるのは、「并ハ合也」の名義考とは相反する点があるのではないかという気がする。「并

Osaka Shoin Women's University Repository

び」の構想論的性格を主想副想、ないし主流傍流の対立でとらえる立場では、おのずから両者の並進として考えざるを得なくなるように思われる。そのために、「并び」に対する本の巻と、物語の本流とが同一視される。

「横笛并鈴虫」を本流傍流に分別することが無理であることは前述した。匂宮三帖に主副の別を立てることも必ずしも適切ではあるまいことも。

「ならび」を本流傍流の並進と考える立場を貫こうとすれば、玉鬘十帖のありかたについて、

玉鬘は傍系の夕顔の後日物語だから、「玉鬘」の巻こそ「乙女」の并としたいところである。さうして「初音」以下九帖は本系に列したいところである。（岡一男博士、「源氏物語の基礎的研究」）

という困難に到達せざるを得ない。だが、前にしばしば触れたように、主流傍流の間に「ならび」の関係があるのではない。「ならび」は数個の巻を一つに括るだけのものである。「ならび」の巻に対する本の巻が、明らかに傍流である例は、宇津保物語の「忠こそ」「吹上」など、典型的な事例がある。岡博士は「玉鬘」に本系に列すべき資格を与えようとされたが、それは無理でもあり、不要でもあると考えるが、いかがであろうか。

五　終　り　に

この稿を進める間に、玉上琢弥博士の「源語成立攷」（国語国文・昭15・4）（源氏物語評釈別巻一「源氏物語研究」に再録）から啓発される所が多かつた。特に、

古く伝わつた並びの巻に何らかの意義を認めようとするなら、横竪というごとき構想論的立場は離れて考えるべきであろう。

と説いておられるのは、この問題の考察に鋭い教訓を与えるものであつた。物語の成立事情に関して発表当時の読者が名づけたものにせよ、成立事情を伝え知つていた後代の観照者・研究家が名づけたものにせよ、早い時代にこの物語がどんな形で読まれたかを示しているものであると思う。氏によれば、並びの巻とは「一まとめにして観照されることを求めるべき巻々」であり、したがつて、「一まとめにして発表されたであろう」と推定でき

Osaka Shoin Women's University Repository

る巻々である。そこに当時の読者の間でなり、時代の観照者によつてなり、それが一まとめにして観照すべきものであることを標示したものである、ということである。これは基本的には、異論をさしはさむ所のない御説であるように思う。「ならび」はそのような、現実的な「読み」の形態を示す名であつたと信ずる。あるいは、「発表事情」ということにはそれほどこだわる必要はないであろう。たとえば「末摘花」が「若紫」より後に時を隔てて発表されたとしても、「蓬生」「関屋」が「澪標」と同時発表であつたとしても、それが「若紫」なり「澪標」なりに内在する短篇性に誘発され、それと照応されるように構想されたとすれば、やがて、それらを一まとめにして読むという読者の知恵がそだつてゆくこともあろう。そのような意味でならば、作品本来が具有する構想形態とのつながりを見ることができる。

性急に本系傍系の対立を「ならび」の観念に結ぶ事が「ならび」の巻々の事実にそむく事は繰返し述べた。「ならび」によつてつながれた群の中の個々の間の関係は一つではなかつた。むしろ雑多な「ならび」の形態を、統一する形態論的特性、それは一つだけ認められる。「ならび」で一つにまとめられる巻々――その本の巻を含めて――には、長篇の主流の巻々と違つた眼をもつて読むべきことを要求する姿態をそなえているということである。傍流を主流と並進させることとは別な、もつと根本的な長篇形成の普遍的方法に関連する。

長篇物語には、時間を逐つて未来に向かつて展開しようとする志向と、逆に時間の進行をゆるやかにして、周辺に視野を拡げようとする志向が、相克的にからみあうのが常である。前者を長篇的というならば、後者は短篇的ということも許される。「ならび」によつて群化された巻々は、一部として長篇的本流の間に挿入され、一個の巻序的位置を与えられる。物語の時間的進行はそこでやすらい、人生の隈々を求めて彷徨する。長篇的姿態の中ではたしかに異色の巻々である。それを読者に向かつて指示するのが「ならび」であつた。

「ならび」そうした異色ある短篇的群の中での巻と巻とをつなぐ標示であるから、一つ低次元に属する。物語の本流に対して他をつなぐものでなかつたことを確認しておかなければならない。「并びの巻」に対する「本の

Osaka Shoin Women's University Repository

の本流に対して他をつなぐものでなかったことを確認しておかなければならない。「并びの巻」に対する「本の巻」と、物語主流を意味する「本の巻」とは混同されてはならない。どちらかが「本の巻」なる名を放棄すべきであろう。